

# 山椿

Sugiyama Shinichi  
杉山 真一 (44期)

## 音楽は自由にする (坂本龍一の自伝のタイトルより)

弁護士という職業を選んで、35年近くが過ぎた。この間、心に残る多くの案件を担当させていただいた。嬉しいときもあったが、辛いこと、悲しいこともあった。心のバランスを保って来られたのは、好きなスポーツや音楽のおかげかもしれない。

今日は音楽、特にギター（アコースティックギター）の話をしようと思う。

ギターに出会ったのは中学1年生の春、ラジオ番組でたまたまサイモン&ガーファンクル（S&G）を聴いたときだった。

「コンドルは飛んでいく」に衝撃を受けてのめり込み、ポール・サイモンは宇宙人であり自分はその生まれ変わりではないか、そうあってほしいとまで思った（確かに小柄なのは似ているがそれだけだった）。

お年玉をためてギターを買い、文化祭に一人で出た。高校生になると3人でバンドを組んでS&Gやそのルーツの一つペンタングル（英国のバンド）などを演奏した。

高校卒業とともに、バンド活動はなくなり、一人でアコースティックギターを変わらず弾いていた。

一方で聴く楽しみは、ロック、

ポップスからジャズ、後年はクラシックや民族音楽に広がった。

弁護士になりたての頃、薬害エイズ事件で、亡くなる直前の原告本人を病院で臨床尋問したことがある。主尋問の途中で涙が止まらなくて嗚咽した（後に先輩弁護士にプロなのに叱られた）。そのときなぜか頭には「戦場のメリークリスマス」（坂本龍一）が流れてきて、おかげでなんとか尋問を終えることができた。

弁護士10年目くらいだったろうか、ブラジル人が勤務先にHIV無断検査をされ解雇された事件。ブラジル人の代理人として全面勝訴したとき、四谷のブラジリアン・バー「サッシペレレ」に招待されてサンバを歌い踊った（周りの真似をして思い切り腰を振ってみた）。びっしょり汗をかいて、大いに笑った。

弁護士生活も20年を過ぎようとする頃、ある会社の社長に誘われて、バンド活動を再開した。今回のメンバーも3人（紅一点）、S&G、PP&Mなど、弾くのは相変わらずアコースティックギターである。

このバンドで老人介護施設を訪問し演奏したことがある。元音楽



ヴィクトリアBC、カナダにて

教師の女性が、久しぶりに生の演奏を聴けたと涙を流して喜んでくれた。ありがたい話であった。

さらに音楽を通じて音楽ビジネス関連の弁護士業務が広がった、と言いたいところだが、それは全くない。先の老人介護施設慰問の際、一人1000円をいただいた程度である。

バリ島では、伝統音楽の優れた演奏家たちがたくさんいるが、音楽ではお金を取らず、別に生業をもっているそうである。お金を取ると伝統が廃れるという理由からだそうだ。

今年、カナダとアイルランドに滞在した際、ライブハウスやレストランでアコースティックギターを一人で演奏する機会があった。予想外に観客が温かく迎えてくれて、ほっとした。帰国したら、事務所の仲間たちと共に、弁護士の仕事を（あのやっかいな案件も）頑張ろうと思えた。

最後まで読んでくれてありがとう。

NF